

学会コミュニケーションの整理とインフォーマル性拡張に向けた考察

An Examination of Conference Communication in Academic Societies and Considerations for Expanding Informality

鈴木 真保^{*1}, 平岡 齊士²

Maho SUZUKI^{*1}, Naoshi HIRAOKA^{*2}

^{*1} みんなの学習環境研究所

^{*1} Minna Learning Environment Laboratory

^{*2} 放送大学

^{*2} The Open University of Japan

Email: m-suzuki@suzukisan.net

あらまし：本研究では分析軸としてフォーマル／インフォーマルさを用い、学会（学術集会）で発生するコミュニケーションを整理した。探究の共同体に基づき筆者らの開発した環境も同軸で分析し、インフォーマル性の拡張について検討した。この分析を活用し、学びに繋がるブレンド型学習環境の設計を目指す。
キーワード：学会，探究の共同体，インフォーマルコミュニケーション，オンライン，ブレンド型学習

1. はじめに

筆者らは学術集会（以下、学会）におけるインフォーマルコミュニケーションを支援するために、大学院生などを対象にオンライン学会の集団視聴環境を設計して、探求の共同体（Community of Inquiry）⁽¹⁾を支援する学習環境の実践をしてきた⁽²⁾。学会では発言しにくくても、集団視聴環境では仲間内で安心してコミュニケーションが取れるため、相互作用から学びを深められる。しかし、その実践は主にオンライン学会を対象としており、集団視聴環境もオンライン上で完結していた。当時はコロナ禍であったためにオンライン開催が主だったが、現在はオンサイト開催に回帰しているため、オンサイト学会での学びの支援環境の在り方を確認する必要がある。本研究ではフォーマル／インフォーマルさを分析軸として、学会でのコミュニケーションを整理する。その上で、オンライン学会集団視聴におけるコミュニケーションも同軸で分析し、比較を試みる。

2. 学会コミュニケーションの整理

2.1 インフォーマルコミュニケーションとは

仲谷・西田はインフォーマルコミュニケーションの枠組みとして implicit な部分と explicit な部分に分け、後者を話題の偶然性、出会いの偶然性、仕事との関わりの3つの軸でコミュニケーションの中での位置づけを示した⁽³⁾。仲谷・西田は3つの軸の大小でインフォーマルさをとらえているため、本研究でもフォーマル／インフォーマルさは濃淡のあるグラデーションのようにとらえる。

2.2 学会におけるコミュニケーション

図1は学会のコミュニケーションの種類をフォーマル／インフォーマルさで整理したものである。フォーマルなコミュニケーションは、学会主催者から

フォーマルなコミュニケーション			
コミュニケーションの種類	話題の偶然性	出会いの偶然性	研究・学びとの関わり
主催者からの告知・連絡	低	低	高
講演／発表	低	低	高
質疑応答	低／中	中	高
講演／発表／質疑応答などへの意見・感想	中／高	中／高	高
近況報告	高	高	高／中／低
雑談	高	高	低
挨拶	高	高	低
インフォーマルなコミュニケーション			

図1 学会でのコミュニケーションの種類とフォーマル／インフォーマルさ

の告知・連絡など、講演や発表など学会の主要コンテンツ、これら主要コンテンツに関する質疑応答などであり、話題の偶然性や出会いの偶然性が低く（質疑応答は中程度もあり得る）、研究・学びとの関わりが高い。インフォーマルなコミュニケーションは、参加者同士の挨拶、雑談や近況報告、フォーマルな内容に関連する意見・感想などが想定され、話題や出会いの偶然性は高いものの、研究・学びとの関わりは比較的高いものも低いものも含まれる。

2.3 オンサイト学会におけるコミュニケーション

図2でオンサイト学会でのコミュニケーションを示した。フォーマルコミュニケーションはフォーマル内で完結するとは限らず、フォーマルコミュニケーションに関連して知人と意見交換するなどのインフォーマルコミュニケーションの契機となり得る。インフォーマルコミュニケーションの中にはフォーマルコミュニケーションと独立したものもあるが、インフォーマルコミュニケーションの内容を契機として、フォーマルコミュニケーションに関与する事



図2 オンサイト学会でのコミュニケーション

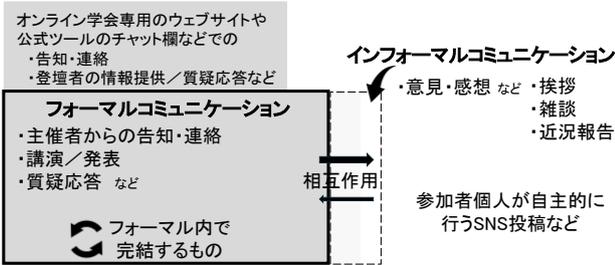


図3 オンライン学会でのコミュニケーション

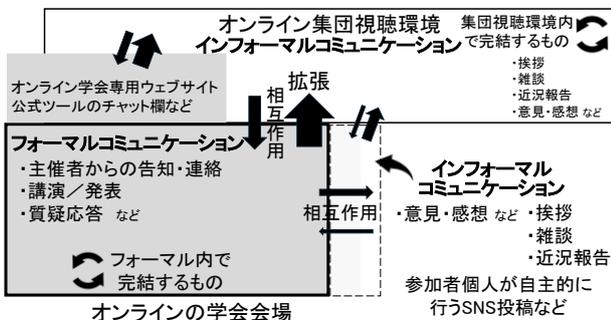


図4 オンライン学会と集団視聴でのコミュニケーション

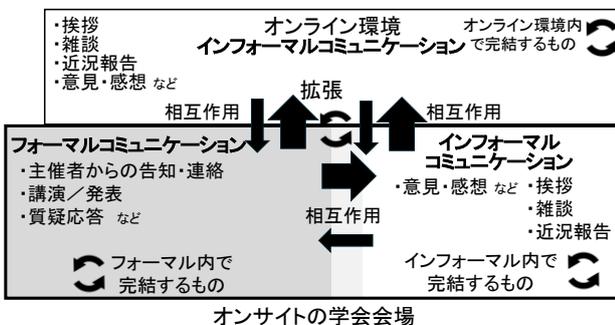


図5 想定するオンサイト学会でのブレンド環境におけるコミュニケーション

例もある。このようにフォーマル/インフォーマルには相互作用が生じると考えられる。

2.4 オンライン学会におけるコミュニケーション

図3にてオンライン学会でのコミュニケーションを示した。オンライン学会では、フォーマルコミュニケーションはオンサイト学会とほぼ同様に実現された。インフォーマルコミュニケーションの機会が公式に提供される事例は少なかったが、参加者個人がSNSを活用するなどの事例は見られた。オンライン学会ではオンサイト学会に比べてインフォーマルコミュニケーションが生じにくい、主催者側がコ

ミュケーション用のウェブサイトを用意したり、Zoomのチャット機能が自然に活用されたりするなど、新たなコミュニケーション手法が生じる面もあった。

2.5 オンライン学会と集団視聴のコミュニケーション

図4は、筆者らが開発したオンライン学会集団視聴²⁾参加者のコミュニケーションを整理したものである。集団視聴環境は、Gahterなどのコミュニケーションツール、Miroなどのオンラインホワイトボード、参加のしおりからなり、参加者は学会と並行して集団視聴環境にもログインして利用する。集団視聴環境はオンサイト学会における仲間内での安心なインフォーマルコミュニケーションをオンライン上に実現するものであり、いわゆるパブリックビューイングに類似した形式である。集団視聴参加者は公式コンテンツに影響を与えることなく気軽にやり取りができるため、話題や出会いの偶然性は高く、インフォーマル性が高い。研究・学びとの関わりは高いものも低いものも存在するが、学びの環境を目指しているため、その関わりを高める工夫がなされる。集団視聴環境でのやり取りの結果、学会の質疑応答に参加するなど、フォーマルコミュニケーションに影響を与えることも想定される。

3. オンサイト学会に合わせたブレンド環境でのコミュニケーションと今後の方向性

オンサイト学会でオンライン集団視聴のような学習環境を実現しようとする場合、コミュニケーションは次のように整理されるだろう(図5)。オンライン上での学会参加支援環境には、仲間内で安心してコミュニケーションが取れ、学びに繋がる情報をやり取りしストックする場としての機能が求められる。参加者はオンサイト会場にしながら、オンライン環境にも参加するため、その相互作用はオンラインのみの場合よりも複雑で密になると予想される。

今後、本検討を踏まえて、学びの深化に繋がるインフォーマルコミュニケーションによる探究の共同体支援のための学習環境の設計を行う。

参考文献

- (1) Garrison, D. R. “E-learning in the 21st Century: A Community of Inquiry Framework for Research and Practice”, 2nd edition, Routledge, New York (2011)
- (2) 鈴木真保, 鈴木克明, 戸田真志, 合田美子: “オンライン学会における探究の共同体支援のための学習環境デザイン”, 教育システム情報学会誌, Vol. 41, No. 3, pp.253-263 (2024)
- (3) 仲谷美江, 西田正吾: “インフォーマルコミュニケーション研究の動向”, 計測と制御, Vol.33, No. 3, pp.214-221 (1994)